不定期刊行　　第515号　2014.07.05

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

槍ヶ岳の残雪、異様に多いです

今年の大町高校の全校登山は、7月16日から1泊もしくは2泊で行われる。コースは全て北アルプスで、8コースが提示され、生徒は希望によって振り分けられる。山岳部を中心としたＯＢがサポートし、特段の理由のない教員が総出で、引率をする。女子限定の白馬乗鞍をはじめとして、唐松、爺、燕という４つの往復コース。鹿島槍～爺、五龍～唐松、常念～燕、燕～表銀座～槍ヶ岳という縦走が４コース。槍ヶ岳以外はすべてが1泊コースである。

体育科の教員が全校登山委員長をつとめ、教員の割り振りや生徒の希望調整をし、全体の統括責任者となる。サポートのＯＢを差配するのは山岳部のＯＢでかつて山岳総合センターの職員をされていた古幡和敬氏。６月中旬には、教員２名～４名、ＯＢ２名～４名、生徒は２０名～８０名の８隊が構成される。以後、前後４回程度の通称「山別会」が隊ごとに開かれ、意識を統一していく。その間引率職員は、下見登山を行ったり、会計をまとめたりと大忙しである。小生は槍ヶ岳隊に割り当てられた。

槍ヶ岳隊は大縦走とも呼ばれ、全校登山でも花形である。しかし、コースの性格上１年生や運動部に所属していない女子は権利なしと、校内のセレクト条件も厳しい。そんなセレクションを経て、今年は２６名（内女子４名）が決定した。教員は隊長が私、体育の教師とＯＢでもある大学出たての若手の計３人の先生が充てられた。

ということで、これはその槍ヶ岳の下見の報告。７月１日早朝６時半に有明駅に集合した３名は中房温泉から登のりだす。第２ベンチで一足先に出発していた燕往復隊に追いついた。合戦小屋を越えるとところどころに残雪が見られたが、これは織り込み済み。燕山荘で挨拶をしたのち、一日目の宿泊地である大天荘を目指す。気の早いコマクサがぼつぼつ開き始めていたが、再来週の本登山のころにはかなり咲くことだろう。大天井ヒュッテへの分岐からの安曇野側の巻き道はまだべったりと雪がついていたので、大天の頂上へは冬道でもあるダイレクトルートで登った。稜線に出てからもずっと槍が見えなかったのは残念だったが、それだけに却って涼しく快適な稜線漫歩だった。久しぶりの山小屋泊りは、テント泊に慣れた身にはあまりにも快適。明日の天気に期待して早々に布団に潜り込んだ。

7月2日は朝から快晴。ご来光も拝むことができた。雪がまだ結構残っている東鎌尾根は、開通宣言が出されていないということであったが、大天荘の情報では2日前に、西岳と大槍の小屋番が危険個所の雪切りは終えているということだった。念のためピッケルとアイゼンを持参してはいたが、使

わねばならないような場面はなく、およそ3時間でヒュッテ西岳に到着。途中あまりに天気がよい上に、時間的にも余裕があったので西岳の頂上にも立ち寄った。常念山脈と裏銀座の山々に囲まれた山懐の展望台で槍穂高をはじめとする北アルプスの峰々の雄大な姿に改めて感動する。大量に雪が残っていた水俣乗越までの下りは、初心者の先生もいたので少し緊張した。水俣乗越に登りあげる槍沢側の顎にはべったり雪が付いていて、まだ誰も登った人はいないようだった。

その水俣乗越を越えて次の鞍部に差し掛かった時のことだ。下の方から何か声がするので覗き込むと、二人組の女性がいて「ロープ持っていますか？」という。どうやら一本沢を間違えて登ってきて、稜線へ最後に登りあげるところで登ることも下ることもできなくなって、進退窮まった様子。ちょっと待っているように指示し、ロープを垂らして救出した。今日の東鎌の通過者は我々のみ。タイミングよく僕らが通りかかったからよかったようなものの、少しでもずれていれば一体どうなったことか？そんなおまけもあって、ちょっと時間を食ったが、12時半には槍ヶ岳山荘に到着。午前中はご機嫌よく顔を見せてくれていた穂先は、上がって来たガスの中に隠れてしまった。それでも行けるときに登っておこうと、頂上に向かった。ガスの中ではあったが、初めて登る若手の先生は大感激。槍ヶ岳山荘に戻って暫くすると、信州山の日記念事業として長山協が公募で行う槍ヶ岳登山の下見のために、槍沢から登って来た松田大さんが到着した。（せっかく登るのだからと松田さんとは示し合わせてあった）朝一のバスで上高地入りし、登って来たが予想以上の雪だったとのことだった。夕刻からは大雨となり、雨音を子守歌に床についた。

７月３日は晴れ渡ってはいないものの、遠望は利いたので、チャンスとばかり朝飯前にもう一回槍の穂先に登った。針ノ木から裏銀座、その奥の立山と薬師、西と東にはピラミダルな笠ヶ岳と常念、もちろん穂高の峰々は圧巻であった。槍沢を覗き込むと確かに雪は多い。２月の大雪とこのところあまり気温が上がらないということが影響しているのだろう。朝食後は早速下山にかかるが、まだまだ十分スキーが楽しめるだけの積雪量、坊主の岩小屋などまだ雪の下で、肩から槍沢をまっすぐ下に滑り降りた。あっという間に氷河公園の分岐に到着。ここでも少し道草を食うことにした。氷河公園まではべったりと雪がついていて、天狗池もすっかり埋まっており、横尾尾根まで雪に覆われていた。結局雪は大曲までつながっていたが、松田さんをしてここ何十年間記憶にない雪の多さだということ、僕自身もそう思った。

昨日二人組が道を間違えたという水俣乗越への分岐の道標はまだ立てられておらず、

ブルーシートに覆われていたが、踏み跡はしっかりついている。彼女たちは地図を見ながらなかなか分岐が見つからないなあと思いながら、標高を見て沢に入り込んだと言っていた。地形と地図をしっかり見極める力があれば間違えることもなかっただろうが、が、まだ登山道が十分に整備されていないこの時期の道迷いの典型的な例だと思い、自戒した。ババ平からは夏道に入り、横尾へ下りあとはひたすら長い梓川街道を上高地まで下った。